2020/11/06

現象学年報第 36 号

# 考えるとき話しているのか

——フッサール「独白」概念をめぐって——

京念屋 隆史（法政大学）

## はじめに

ひとは考えるとき何をしているのか。例えば風呂の中で明日の予定について考えている人は、お湯の暖かさの感覚をもち、自分の手足が視界に映っているかもしれないが、しかしこうした現実に起こっている事柄は彼の思考内容とは何の関係もない。さらには思考する人をこのように外から眺める視点をとらず、まさに私が思考しているときには、ただ思考された世界だけが現象しており、こうした目の前にあるものごとは何も意識されていない。だとすればなぜ、何も現実と関係のない事柄について、いま現実に思考することができるのだろうか。

この問いに対する答えとして、我々は人と話すときだけでなく思考するときにも心の中で言葉を使っているからだ、というものがありうる。内語は思考とその意味内容において密接な関係をもち、かつそれが心の中で見られていることによって対象へと向かう思考を現実において媒介しているのだ、と。

しかし本発表はむしろ、思考が内的言語によるという見方に対する、次のような疑念から出発してみたい。例えば柏端（2016）は「思考は頭の中にあるが言語は（たぶん）ない」と題された節でこう述べている。「独言や内語の存在を否定するつもりはない。〔中略〕だがこれは思考の一種なのだろうか。心的表象の一種なのだろうか。私にはこれは、どちらかといえば、身体表面にはっきりと現われない発話行為の一種であるように思われる」（柏端 2016, p. 99, 註 15）。私はこの問いを次のように言い換えてみたい。確かに我々は心の中で言葉を発することはある、だがそれは考えることと事実似ているだろうか。考えるとき絶えず心の中で独り言を呟いているというのは——思考が媒介なしに世界に届くというのと同じくらい——何か不自然な見方ではないか。それはせいぜい**話しながら**考えているというだけで、決して考えることそのものにはならないのではないか。

にもかかわらず本稿は、思考を直接成り立たしめるような言表があることを主張する。そしてそのために、内的な言表の中には上述のような発話ではないものが、つまり「私が話す」ものとは異なる言表の経験がある、という可能性を考える。このため本稿の議論は一貫して、（内的発話を含めた）通常の発話と内語との間の差異の探究へと向かう。本稿はまず、『論理学研究』第一研究のフッサールが「独白」に与えた、「告知」の機能を持たない言表であるという規定を明らかにする（第 1 節・第 2 節）。そしてこの独白の非告知性を、デリダが「声（voix）」に与えた「自分が話すのを聞く」という特徴づけを手がかりに、別の角度から考察する（第 3 節・第 4 節）。

Hello[[1]](#footnote-20).

See you[[2]](#footnote-21).

## 2 心的言表の分類学——独白とは何ではないか

### 2-1 告知を伝達から区別する——想起された発話

フッサールにおいては、独白の非告知性はおそらく誤った根拠をもとに自明視されてしまっている。これに関してデリダは、フッサールの議論を要約しつつ次のように批判している。

よく認めておかねばならないのは、表現と指示の区別の基準が、結局のところ「内的生」についてのきわめて簡素な記述に委ねられているということだ。すなわち、そうした内的生においては伝達が存在しないがゆえに指示は存在しないだろうし、他我が存在しないがゆえに伝達は存在しないだろう、というのである。（Derrida 1967, p. 78）

フッサールの誤りは、「指示（indication）」すなわち告知機能を、他人への伝達と同一視していることだ。しかし伝達に関してならば、言表に何も伝達させないためには、ただ単に、他人に聞こえないように、「心の中で」表象するだけで十分ではないだろうか。より正確には、想起や想像を含めた準現在化された言表は、他人に聞こえないがゆえに非伝達性の要件を必ず満たす。

しかし非伝達的だが告知的であるような内的言表はいくらでもある。例えば、あのとき彼はこう言っていた、と想起された言表は必ず、彼がそのときそう思っていたことを告知している。つまり、そのように告知される彼の『思想』が彼の言表へと表明されていたのだ、という仕方で過去の言表を捉えるだろう。そして告知機能は、その話し手が他人ではなく自分であった場合にも例外なく機能する。だから自分の過去の発言は、そのときの自分がそう思っていたということの、その『思想』の指標として役立つだろう。本稿はこのことを「自己への告知」ないし「自己告知機能」と言い表す。このことは告知の外延が伝達の外延よりも広いことを示す重要な事実である。

### 2-2 想像された発話

さて、「独白」ということでフッサールの念頭にあるのは、想起ではなく想像された言表であった。想像が想起と異なるのは、想起された対象は過去の実在であるが想像された対象は実在しないという点、つまり存在定立の無さという点に尽きる。

しかし、この非定立性が非告知性へと直結するわけではない。想像された言表の中にもまだ告知機能を持つものがあるのだ。例えば、ある言表を過去に彼が言ったことだと思っていたが、他の証拠と突き合わせるとそれは記憶違いであり、自分が想像の中で彼にそう言わせていただけだったと判明することがありうる。これは存在定立が外れて想起が想像へと移行する例であるが、この移行においてもなお、準現在化されたその言表は彼が言わんとすることの表明であり続けている。違いはただ、その話し手が現実の彼であるか架空の彼であるかという点にしかなく、彼が発話者でありその『思想』を表明している、という構造そのものにはいかなる変化もない。つまり言表が指標として機能しないためには、実在するものとして想起されても、実在物として想像されてもならないのである。こうした告知機能をもつ心的言表のことを、本稿では独白ないし声と区別して「想像された発話」と呼ぶことにする。

こうした想像された発話はおそらく、次のようなフッサールの例示の中にも混入している。

確かにある意味ではひとは孤独な言表においても**話している**、またその際確かに自分自身を話し手として統握することもできるし、それどころか場合によっては自分自身に話しかけている者として統握することもできる。例えば誰かが自分自身に対して「お前は悪いことをした、これ以上そんなことをしてはいけない」と言うような場合である。しかしこの場合ひとは本来の意味で、すなわち伝達的な意味で話しているのではない。ひとは自分に対して何も伝達してはおらず、ただ自分自身を話し手および伝達者として表象しているにすぎない。（Hua XIX/1: 42）

ここでのフッサールの関心事がたかだか伝達に関するものである限り、本稿はそれに異論を持たない。しかしこの「お前は悪いことをした」が告知機能をもつこと、つまり私の『後悔の意』の表明であることは明白ではないだろうか。というのも主観は自分に話しかけながら「自分自身を話し手および伝達者として表象」（ibid.）しているからである。このとき「お前は悪いことをした」というのはその私という話し手が持っている『思想』として表象されることになるだろう。その限りで、この内的な話しかけは独白ではなく想像された発話に分類されるべきなのである[[3]](#footnote-24)。

## 3 「心の声」の文法学

本節以降では、前節までで示した独白の非告知性をより具体的に、かつ別の角度から究明することを目指す。その発端として私が特別に取り上げて考察したいのは、漫画における思考と独白（モノローグ）の描写であり、その「吹き出し」と呼ばれる記法である。漫画の吹き出しには大別して風船型と泡型の二種類があり、風船型の吹き出しは登場人物の通常の発話を表す記法である。そして泡型の吹き出しは人物が考えている内容を、いわゆる「心の声」として表す記法である。

本節はこうした漫画の記法の文法的考察を出発点にとり、私の実際の思考作用を（例えば体験の反省によって）記述することから始めない。その理由は、後に見るように、考えることの現象そのものを直接見ることには或る本質的な困難があるからだ[[4]](#footnote-27)。それは一言でいえば、最も手前にあるものを見ることの困難である。つまり、このあまりに近すぎる現象へのアプローチは、むしろ見るための距離を必要とするのだ。

漫画の記法はこの要求を満たす。漫画においてその距離は、登場人物によって内側から生きられた世界が、無視点的な客観的世界の上にいわば重ね書きされることで実現している。本節の考察はこの二重化された眺めのもとでなされる。

### 3-1 二種類の吹き出し

漫画の描写の一つの約束事は、読者がその作中世界を、程度の差はあれ、神のような超越的視点から見渡せるということだ。だから登場人物の内面もまた等しく客観的に描かれる。泡型の吹き出しもまたそうした道具立ての一つであり、それは本来なら見えないはずのものを可視化して描く。

ところで、ここで「見えない」とはどういうことか。もちろん当人の思考は他人からは見えないが、しかしそうではなくここで強調したいのは、実は当人から見えていない、という意味での不可視性である。発話を表す風船型の吹き出しであれば、それは自分の口元から湧き出した、世界の中に産出された一個の対象として知覚することができる。しかし泡型はこれと違って、例えば彼の隣に、あるいは部屋の中に存在すると語ることはできない。泡型は、そのような対象的な仕方で他の事物との境界づけにおいて捉えられているのではなく、またより重要なことだが、自分の頭から吹き出ているものとして知覚されているのでもない。思考する人物はただ泡型の吹き出しの中身だけを見て、その内で生きているのだ。

#### 小見出し

さらにもう一つ、特筆すべき差異を挙げたい。それは、風船型のそれとは違って、泡型の吹き出しは必ず、その人が**本当に**思っていることを表すということだ。つまり、泡型で嘘をつく、といったことは起こらない。実際、そうした場面を見たことがあるだろうか。おそらくないだろうし、そしてまた、ただ偶然そうなっているのでもないだろう。

その理由は、一方ではもちろん作劇上の都合ではある。つまり、発話だけでなく独白も嘘だと仮定すると、漫画の読者からみてその人物が何を考えているのかが分からなくなってしまうからだろう。嘘をついていることを描く最も簡単な方法は、風船型の吹き出しを泡型のそれと内容的に矛盾させることだ。風船型で言わせた内容を打ち消す内容を泡型の吹き出しで言っているなら、読者は泡型の方を信頼し、こちらが本音なのだな、と気づく。だが、まさかその独白もまた嘘である、などとは想定しない。というより、もしそれもまた虚偽であるなら、さらにその背後で誠実に語っている場面が今度は描かれるべきだろう。それが漫画の文法と世界構造に対するある種の信頼である。かくして、「心の声」は嘘であることはできない。漫画の読者は人物の内面まで見渡すことができるので、必ず、その人物が嘘をつかずに本当に考えている場面を眺めることができる。

* リストレベル 1
* リストレベル 1
  + リストレベル 2
  + リストレベル 2
    - リストレベル 3
    - リストレベル 3
      * リストレベル 4
      * リストレベル 4

1. その１
2. その２
3. その３

1. Guten morgen. [↑](#footnote-ref-20)
2. Adios! [↑](#footnote-ref-21)
3. 内語を想像された発話から区別するという発想を、筆者は永野（2015）が扱っているような、内語にまつわる現代の心理学的諸研究から学んだ。それらの研究はどれも、心の中で発せられた言葉なら何であれ「内語」であるはずだ、という前提を疑うことから出発している。例えば Gregory（2016）は、極めて小声で何かを言うのを想像すること、自分に向かって何かを言うのを想像すること、等々をすべてこの想像された発話に割り振っている。 [↑](#footnote-ref-24)
4. 単なる内的発話ではない、真正の内語を反省することは経験的にもすでに困難を含む。例えば Hurburt et al.（2013）は、内語にまつわる当人の報告が実は信用に足るものではないこと、またその内観にはある種の習熟が要ることを指摘している。 [↑](#footnote-ref-27)